

研究の紹介

小ギク親株の合理的管理方法

～ 合理的な親株の管理で計画生産と計画出荷！～

1. はじめに

旧盆出荷の小ギクは、定植される前年の親株管理から生産が始まっています。しかしながら、親株管理中は、秋冬期低温寡日照条件下や暖冬等により、さし芽苗の本数確保や目標とする開花時期に変動が見られています。そこで、親株管理期間中の天候を考慮した管理方法について、温度、光の環境から検討し、併せて最終摘心の位置について明らかにしました。

2. 親株管理の重要性

夏秋小ギクの親株栽培・管理とは、苗半作と言われるように、良いさし芽苗の生産を行うことにあります。また、親株育成期間中に低温を受けることによって、生育に大きく影響を与える能力（伸長性、ポリウム、開花時期等）を身につけていくことから、キク栽培を行う上で非常に重要な時期になります。

3. 親株定植及びその後の管理法

親株は、切り花後の株から発生してくる側枝をかぎ取り定植します（かぎ挿し）。親株活着までは、発根適温である 15～20 で管理し十分に発根活着させ、低温を十分に受けることが可能な状態を作ります。

親株活着後低温寡日照条件下でロゼット状態になった後、定植後の生長に関わる能力を獲得するための低温を受ける時期になります。この時の温度と遭遇期間は、本試験結果から、

平均気温で 10 以下 60 日間必要であることが分かりました。おおよその目安としては、2 月上旬になります。

4. 節間伸長の開始（幼若相）

低温に遭遇したあと、冬至芽は気温の上昇とともに節間伸長を開始します（幼若相への移行）。

本試験では、冬至芽、上芽の発生・伸長を促すため、12 加温開始時期の検討を行いました。1 月中の加温開始では、冬至芽、上芽の発生量が多くなるものの、不時発らいが多発し、開花に関する質が悪いさし芽苗生産となりました。前述したように平均気温 10 以下で、60 日間を過ぎた 2 月上旬の加温開始では開花に関する安定な質と冬至芽、上芽の量の確保が可能でした（表 1）。

表1 親株の加温開始時期がさし芽苗に及ぼす影響 品種'はじめ'

12 加温 開始月日	さし芽苗		冬至芽苗	
	定植本数 (本/株)	内不時発 らい率 (%)	定植本数 (本/株)	内不時発 らい率 (%)
11月9日	0.8	75.0	1.0	50.0
12月25日	2.4	8.3	2.0	40.0
1月10日	4.0	0.0	1.6	25.0
1月23日	3.8	0.0	0.6	16.7
2月5日	3.8	0.0	0.8	0.0
無加温温室内	2.4	0.0	2.0	0.0

親株1株から定植できる本数
育成場所 ガラス温室(最低夜温12 温湯にて加温)
親株定植 2001年11月9日
栽植密度 株間15cm×条間15cm、6条植
摘心月日 2002年3月1日
調査月日 2002年5月8日

このことは、冬至芽、上芽の節間伸長開始が、開花へのカウントダウンの始まりを意味し、また、節間伸長開始後の高温・強日射は、開花を早め、逆に低温寡日照は開花を遅延し

てしまうことを示唆しています。

5. 親株育成期間中の光環境は

親株育成期間中の光環境は、冬至芽の発生量に大きく影響していることが分かりました。冬至芽は、土中から発生してきます。その際、地表面に光が十分当たる場合、その発生量が多いことが分かりました(図1)。

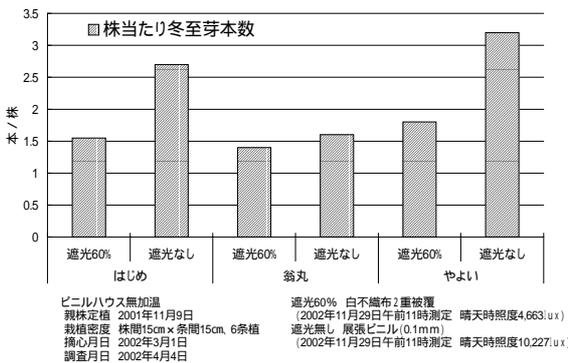


図1 親株管理時の光条件が冬至芽の発生量に及ぼす影響

したがって、親株育成圃場は、日当たりの良い場所を選定する事が非常に重要であると共に、反射マルチ等を利用し、畝地表面に十分光が当たるよう光環境を改善することも考慮したいところです。

6. 最終摘心時期と位置について

最終摘心は、さし芽を行う 30~40 日前に行います。その際の摘心位置を検討したところ、生長能力の高い側枝発生が期待される株もと近くの摘心より、生長点付近での摘心によって、さし芽苗の確保量が多くなりました。また、摘心位置が高いことから心配される不時発らい、短茎開花も見られないことから、最終摘心は生長点付近で行うと良いことが分かりました。

7. おわりにあたって。

今回の試験結果から、冬期間の天候を考慮した親株管理が可能となり、生長能力の均質な苗の確保を容易にすることが期待されます。しかしながら、定植後の気象条件は、その後の生育や開花時期に影響を及ぼすことから、定植後の気象条件にも対応できる栽培技術・生育開花予測診断技術の確立・開発が必要と考えています。

(花き課 島 嘉輝)

表2 親株管理表

月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
施設	ハウス		ハウス	ハウス	ハウス	ハウス	ハウス
栽培管理・作業等	親株植え付け(かぎ挿し)		分化してくる蕾、花の摘み取り	かぎ挿した親株の株元からの切り取り	加温・保温開始時期	最終摘心(さし芽)	さし芽
期間/目標温度	発根、活着まで・15 ~ 20 おおよそ2週間		活着後~ロゼット相通過まで 平均気温10 以下 おおよそ60日間		側枝、冬至芽の伸長 平均気温10 ~ 12 を目標とする		発根 適温の20 を目標
キクの生育相	~ロゼット相		ロゼット相~幼若相		幼若相		
光の管理	冬至芽の発生を促すため親株管理期間を通じて日当たりを良くする(土壌表面に十分光が当たる管理)						
管理の必要性、注意事項等	かぎ挿した親株の発根、活着が悪いと冬至芽の発生が悪くなる。 すなわち、かぎ挿した親株の発根、活着を良好にする期間。		蕾、花の摘み取りは、冬至芽の発生を促す。 十分な低温によって、不時発らい、短茎開花を防止。 光を地表面に当てることによって冬至芽の発生を促す。 かぎ挿した親株を切り取り、冬至芽の発生・伸長を促す。 1月になると冬至芽の伸長も見られるため20cm以上にならないように最終摘心まで摘心を繰り返す。 最終的摘心までは、3枚~5枚の展開葉を残すように摘心する。		側枝・冬至芽(さし芽苗になる)の発生、伸長を促す期間 幼若相の早期通過(早期開花)にならないよう高温管理にしない。 さし芽苗確保のため、最終摘心は、生長点付近で行う。		

注)
ロゼット相 : 一時的生育を停止したり、節間伸長をしなくなる状態
ロゼット相の通過 : 5 以下3~5週間(本試験では、平均気温10 以下60日間)で通過
幼若相 : 節間伸長を開始し生育しているが、花成誘導のできない状態
幼若相の通過 : 生育適温、高温、強光など生育を促進する条件で通過
幼若相を通過すると花成誘導の条件が整うことにより直ちに花芽分化する